「地域資源を活用した体育学習」

～ミニサバニ乗りの実践を通して～

沖縄県　石垣市立吉原小学校

教諭　小林　弘樹

１　研究目的

平成３２年度より新学習指導要領の全面実施がスタートする。文部科学省の「学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策」の中には，「カリキュラムマネジメントの重要性」として，「教育内容と，教育活動に必要な人的・物的資源等を，地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。」とある。

本県沖縄は立地や歴史的な特性から，独自で多様な文化が発展し，現在まで多くの地域の行事や祭りが継承されている。その中には，ハーリー競漕，旗頭，棒術等，体育的な要素を含む行事も少なくない。

そこで本研究では，①体育科における地域資源の活用法，②地域資源の活用による子ども達の変容について研究を進めることとした。

ハーリー

棒術

旗頭

２　研究仮説

（１）体育科において地域資源を教材として取り入れることで，学習意欲が高まり，技能の向上が見られるであろう。

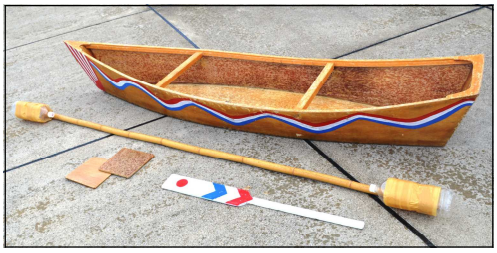
（２）地域資源を活用することで，子ども達の地域に対する理解が深まり，地域への想いが高まるであろう。

３　研究内容

（１）教材「ミニサバニ」について

「ミニサバニ」とは，４０～５０年ほど前に八重山地方で子ども達が海上の移動手段として使っていた木製の小さな船である。用途は，楽しむため・遊ぶためというよりは，より多くの魚を釣るための防波堤までの移動手段として，実用的に使われていた。

①ミニサバニの構造



・ミニサバニ　長さ 2400 ㎜　幅 550 ㎜　高さ 250 ㎜

・バランスパドル　長さ　2500 ㎜
（両端にペットボトルを装着）

・手こぎ板　200 ㎜× 200 ㎜

・ミニエーク（かい）長さ 900 ㎜

②ミニサバニ乗りの体育における特性

ア構造的な特性

不安定な水上に浮かぶミニサバニでより安定して移動するために，移動時のバランス感覚が必要とされる。また，移動や方向変換等に使用する用具(パドル)の操作技能が必要とされる。

イ機能的な特性

初めの段階は，一人でバランスを取りながら進む技能を身につけ（克服型），次にスピードやいろいろな技に挑戦し（達成型），さらに個人やチームでスピードや技を競い合う（競争型）。技能習得の段階を追って機能的な特性が発展的に変化していく特徴を持つ。

（２）学習指導要領との関連

「ミニサバニ」を教科体育として位置づけるにあたり，学習指導要領の以下の点との整合性から，３・４学年「体つくり運動・多様な動きをつくる運動」として取り扱う。

３学年及び４学年の内容　A体つくり運動　　（１）運動　イ多様な動きをつくる運動

多様な動きをつくる運動は，体のバランスをとったり移動をしたりする動きや，用具を操作したり力試しをしたりする動きを意図的にはぐくむ運動を通して，体の基本的な動きを総合的に身に付けるとともに，それらを組み合わせた動きを身に付けることをねらいとして行う運動である。多様な動きをつくる運動は，次のような運動で構成される。

(ｱ) 体のバランスをとる運動

姿勢や方向を変えて，回る，寝ころぶ，起きる，座る，立つ，渡るなどの動きやバランスを保つ動きで構成される運動を通して，体のバランスをとる動きを身に付けることができるようにする。

(ｳ) 用具を操作する運動

用具をつかむ，持つ，降ろす，回す，転がす，くぐる，運ぶ，投げる，捕る，跳ぶ，用具に乗るなどの動きで構成される運動を通して，用具を操作する動きを身に付けることができるようにする。

(ｵ) 基本的な動きを組み合わせる運動

バランスをとりながら移動する，用具を操作しながら移動するなど２つ以上の動きを同時に行ったり，連続して行ったりする運動を通して，基本的な動きの組み合わせた動きを身に付けることができるようにする。

４　研究の実際

（１）単元名「ミニサバニ乗り」（体つくり運動）

（２）単元の目標

関心・意欲・態度	思考・判断	技能
ミニサバニ乗りに進んで取り組み，きまりを守り仲良く運動したり，場や用具の安全に気を付けたりすることができるようにする。	ミニサバニ乗りの行い方を工夫してできるようにする。	体のバランスや移動，用具の操作などとともに，それらを組み合わせることができるようにする。

（３）指導観

・プールでの活動を安全に行うことと，水中での安心感を与え思いっきりチャレンジできるよう，単元の導入では，ライフジャケット着用体験をさせる。

・ミニサバニの推進力を得るためのパドルは，個人の操縦術に応じて使えるよう，手作りのバランスパドル，手こぎ板，ミニエークの３種類を準備する。

・初めは，転覆の恐怖心を与えないようグループやペアで補助をしながら安心してミニサバニに乗ることからスタートし，徐々に自分にあったパドルを選択して一人で移動する活動を行い，発展として二人乗りでバランスをとる活動を行う。

・ミニサバニに一人（補助無し）で乗れない児童に対しては，水への恐怖心を増幅させないよう，補助浮きを付け，小プール（水深 50 ㎝）で自分の出来ることを少しずつ増やす活動を行わせる。

（４）単元計画

時	めあて・活動内容	評価
1	ミニサバニに乗ろう ・ライフジャケットで浮く感覚をつかみ安心感を得る。 ・ミニサバニを体感し自分のめあてを考える。	関意 技能
2	ミニサバニでバランスをとりながら移動しよう ・グループで支えてもらいながら→ペアで後ろから支えてもらいながら→一人（支え無し）でミニサバニにのりバランスをとりながら直進する。	関意 技能
3 4	自分にあったコースで練習しよう ・一人でミニサバニを操作し，ターンをしたり友だちと競漕をしたりする。	思断 技能
5	二人でバランスをとりながら移動しよう ・二人乗りでミニサバニを操作し，ターンをしたり友だちと競漕をしたりする。	思断 技能

（５）指導の実際

【第１時】

安全確認のため，ライフジャケットをつけての浮く体験からスタート。

はじめは４人グループを作り，３人で補助をして舟に１人が乗り，２５ｍ移動する体験をローテーションで行った。バランス感覚の高い児童は，補助児童を付けないでの移動を楽しむ姿も見られた。

【第２時】

段階的（３人補助→１人補助→補助無し）に１人で乗れるように進んでいく活動を行った。活動が進むにつれ，補助児童を徐々に減らし，一人乗りまで進む児童が増えた。

また，移動に使う手具の選択は，ミニサバニのイメージや経験がある児童は手こぎ板での挑戦が見られ，初めての児童やバランスの不安定な児童は，バランスパドルの使用が見られた。

【第３時】

この時間からそれぞれのめあてで自分にあったコースを選択し学習を進める。

一人乗りが得意な児童はタイムに興味を持ち，友だちとスピード競漕をする姿も見られた。速さを追求し勝負をする様子はまさにハーリー競漕そのものであった。

【第４時】

バランス感覚の習熟の高まりから，転覆への恐怖心も減り，多くの児童が主体的に楽しめるようになってきた。

この時間は，水中にペットボトルで作ったブイを浮かべ，ターンの課題を追加した。次第に，内側を弱くかく，ブレーキを掛けるなどの動きの工夫を発見したり，他の友だちの良い動きをまねしながら思考・判断し，課題をクリアしていく児童の姿が見られた。

【第５時】

単元の最終時，二人乗りをする取り組みを行った。

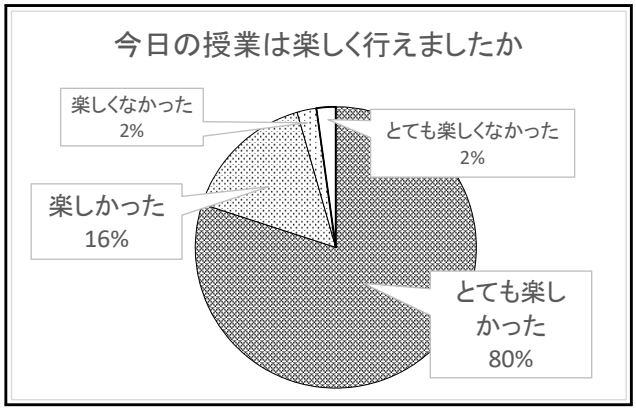
多くのペアがエークでの活動を始める中，運動における技能，思考・判断力が高いペアが背中合わせに座り，前の児童が手こぎ板，後ろの児童がバランスパドルでこぎ始めた。後に意図を聞くと「前の手こぎで推進力を作り，後ろのパドルでバランスをとる工夫。」であった。背中合わせに座ったことは，後ろの児童の視界確保のためであったが，２人の重心が中央に集まることで，より安定する効果も得られたと考えられる。

授業終盤では，手こぎ板２人のペアが多く見られた。これまでの手こぎ板でスピードに乗って進む爽快感や，スピードに乗ることで安定が増す事等の体験からだと考えられる。

５　研究結果と考察

（１）児童ワークシートより

①授業後の関心・意欲



②進級表による技能面の変容

級	クリア目標		第1時	第5時
1	一人で	ターンをして20m（40秒以内）		2人
2		ターンをして20m		7人
3		25m進む（30秒以内）		7人
4		手こぎ板で25m	3人	7人
5		バランスパドルで25m	4人	2人
6	支え１人・バランスパドルで25m		6人	
7	支え１人がおしながら25m		12人	2人
8	支え３人がおしながら25m		2人	
9	（ライフジャケットを着用し） 転覆して安全に着水することができ			
10	ライフジャケットを着用し 安全に浮かぶことができる			

（２）成果と課題

〇成果

・「ミニサバニ乗り」では，失敗（落ちること）にも楽しさの要素が有り，技能の高低に関わらず，高い学習意欲となっていた。

・ミニサバニの持つ機能的な特性から，全ての児童が自分の技能の習得状況に応じた課題を持ちながら活動を進めることができ，技能の向上が見られた。

・「ミニサバニ乗り」を通して，地域特有の楽しさやすばらしさを味わわせることができた。

〇課題

・系統的・組織的な継続指導のために，発達段階に応じると共に，指導要領にも即した学年別の年間指導計画の作成が必要。